鉄輪温泉開基の

一遍聖人とその生涯

大野保治

一　一遍聖人、入滅す

正応二（一二八五）年五月のころ、四国伊予の遍路道を一遍聖人の一行が通りすぎた。聖人を先頭に弟（甥、子）ともいわれる聖戒、愛弟子の他阿弥（真教）、それにつづく数人の尼僧たちであった。

讃岐国（香川県）の善通寺（真言宗、空海の創建）から曼陀羅寺に参詣。阿波国（徳島県）から淡路島に渡り、近くの福良の泊で聖人が病む。七月一八日、一行は聖人をいたわりながら明石の浦に渡り、兵庫の観音堂（現神戸市兵庫区西月山真光寺）で病の床についた。ここで、最後の法談をおこない、遺戒の詞（遺言）を聖戒に書き取らせ、所持物すべてを焼却させた。

聖人の入滅の状況を、史料により描出すれば――

「では、ワシの話を聞いておくれ……人間の世界はナ、五蘊（注①）といって色・受・想・行・識の五つから成っているんじゃ。」

「……人間世界はナ……物質と精神の織りなす現象じゃ。……また、四大天王（注②）といってナ……一切の物質を構成するのは地、水、火、風の四種じゃ。……五蘊も四大も、その中には人間を苦しめ悩ますものは、何一つとして無い……」。

「これからが大事じゃ。よく聞いておけ……一番大事なものは人間のもつ五欲じゃ。五欲とは何か……それは財、性、食、名誉、それに睡眠だ。……これら人間の欲望には切りがない。人間は所詮、「悟り」を開いて仏陀のもとに帰るしかないのじゃ。……」

「人間往生の最大の障害は…我欲の心だ。……ワシは「算」を配り、念仏を唱えながら踊れば……往生できると「遊行」してきた。……何もかも捨ててしまえとナ。……財も地位も、名誉も金も、すべてだ。だが、心に捨ててならないものは…ナムアミダ仏…この六字だ。ワシの教えも一代限りで結構。……葬いごとなど、せんでよい……皆の衆、永いこと世話になったナ……」。

聖人は、こんな風に説いて必定往生したのであるま

いか。「我が化道（教化して導く）は、一代限りぞ」と宗派の創設を禁じ、また「葬礼の儀は整うべからず。野に捨てて獣に施すべし」とまで言いきっている。

忌日は正応二（一二八九）年八月二三日（辰の刻）。親しい弟子たちに見送られ、仏の礼讃を誦しながら静かに入滅していった。ときに享年、五一歳。

弟子たちは、聖人の「独りむ（う）まれて独り死す、生死の道こそかなしけれ」の口語（「一遍上人語録」）を思い出しながら、観音堂の前の松の木の下で荼毘にふし、墓所をつくった。今、真光寺に残されている五輪塔がそれであろう、という。

注① 五蘊－仏教語（梵語）現象界の存在の五種の原理である。「色」は物質と肉体、「受」は感受作用、「想」は表象作用、「行」は意思・記憶、「識」は認識作用・意識のこと。

注② 四大天王－「四大」とは、物体を構成する地、水、火、風の四元素のこと。「天王」とは、欲界第六天の天主をいう。

二 聖人の生いたちと生涯

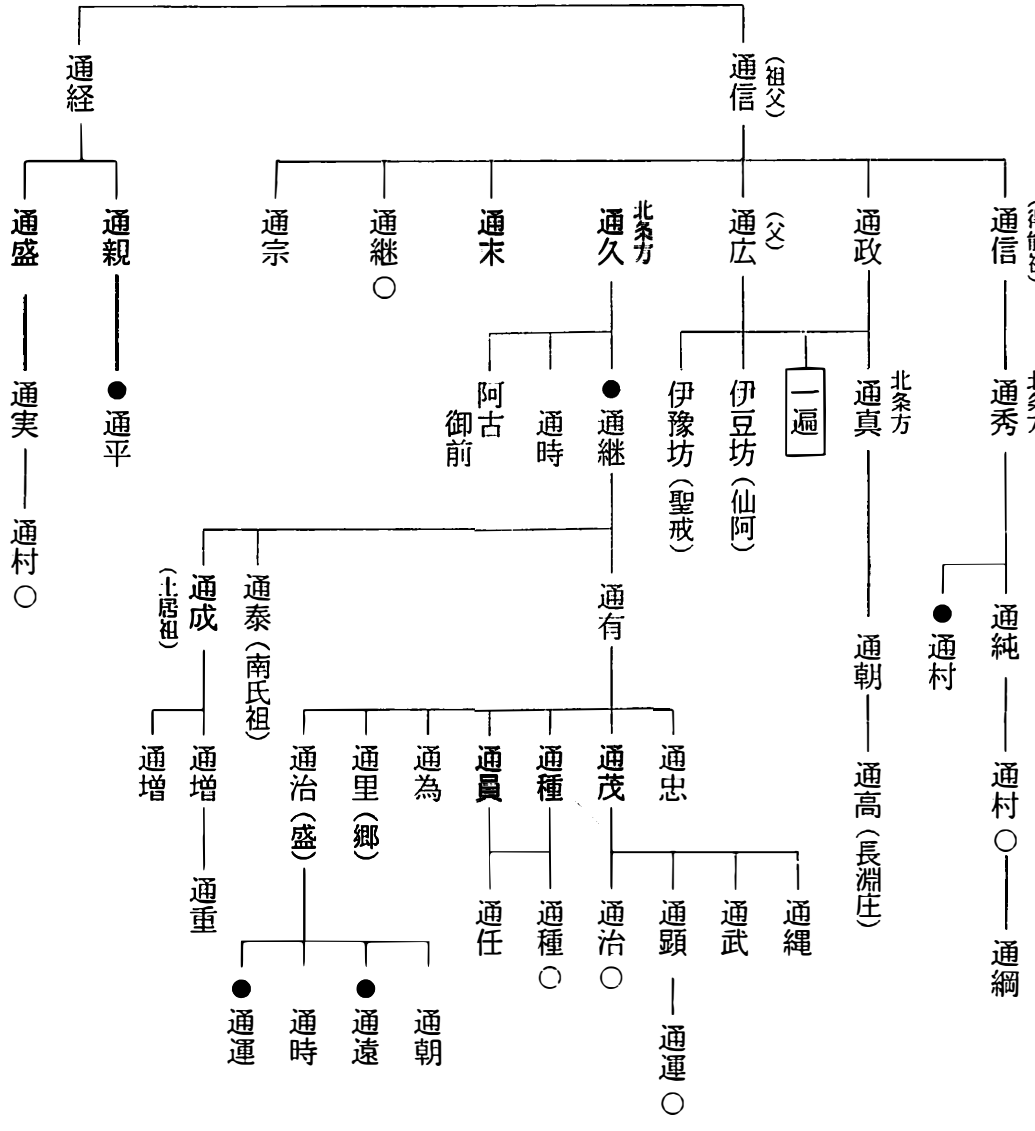
世にいう一遍聖人－時宗関係者によると、正式の尊称は「聖誠大師一遍智真聖人」とある。

鎌倉中期、古代以来の念仏系遊行者の活動を結集して、「時宗」を開く。宗系は、浄土宗（主流の西山派）。生国は四国伊予国、道後の出身である（一説では、瀬戸内海の大三島とも）。

鎌倉武士のうちでも、家門を誇る河野家の出である。河野氏の家祖は、往古（約二千年前）、中国の秦の始皇帝の命で不老不死の仙薬を求めて来日した帰化人（徐福）とも伝えられる。氏神には、瀬戸内海の守護神、大山祇神（愛媛県大三島町大山祇神社）を祀る。

父は河野七郎通広（出家して如来と号した）といい、母は、讃岐出身の僧空海の血筋とも、京の公卿の血をひ

【河野氏系図】（○印はもとの続柄、●印は養子関係を示す）



（故）浅山円祥（松山市宝厳寺住職）著『一遍と時衆』より引用

本書は、浅山円祥師が大正大学の講座「仏教学各論」で一遍聖人の教学を講義した折のノートを中心に、生前の幾つかつ論文を加えて、一遍会（代表 越智通敏）が発行した（時宗宗教長　水島真之「序文」）。

一遍聖人の生誕や生涯について、数少ない著作の中で必ずしも一致せず、異説も見られる。聖人が生まれた寺とされる宝厳寺の浅山和上（わじょう、和尚のこと）の遺稿が出版されたので、本稿は上掲書の「家系図」を使用させて頂くことにした。

くともいうが不詳。その次男として延応元（一二三九）年にうまれた。幼名を松寿丸といった。

祖父、河野四郎通信は、河野家累代の中では最も活躍した人物とされる。すなわち、源平の戦いでは、瀬戸内海に河野水軍の名をはせて源氏を援けた。その功績で源頼朝より道後七郷、のちに伊予一円の守護職に任ぜられる。だが承久の変（一二二一年）では、朝廷側に加担したかどで遠く奥州（江刺の地）に流され、その配所で没している。父はその時、血縁の河野通秀らが幕府側に組していたため、辛くも難をのがれたと伝えられる。

一遍聖人の家系や家族（構成）、生涯について詳しい文献は少ないようだ。入寂に際して、所持物すべてを焼却させたことも一因であろう。弟とも子、甥ともいわれる聖戒にしろ、また遊行に相伴した尼僧、超一は「妻」ともされ、十六年間の遊行で途中から「聖絵」（後述）の中で姿を消している。

本稿では、聖戒は「弟」、尼僧・超一は「事実上の妻」と想定して記述した。一遍聖人の研究者としては定評のある著作（栗田勇『一遍聖人―旅の思索者』新潮社、および同書名の文庫版）の見解にしたがうことにした。

―一〇歳で出家、太宰府へ―

一遍聖人は、一〇歳のとき母と死別し、はじめて世の無情を知る。父の命で出家し、筑後の太宰府で学僧として知られた聖達（西山派の祖、証空の愛弟子）の門下に入った。

そこで「智真」の名を与えられ、浄土教の信仰を深め、この期間に曹洞禅をも修行した。師の聖達は、妻帯した僧、すなわち穢僧であった。当時、結婚しない僧は浄僧と呼ばれ、穢僧との間に激しい対立があった。

当時、興隆していた浄土教の開祖は「法然」である。その教旨は、浄土三部経を拠り所に、自力で悟りを開く自力教（その代表は禅宗）ではなく、ひたすら他力本願によって極楽往生を遂げることを目的とした。

その門流は、証空の開く西山派と弁長の開く鎮西派など、五派に分かれていた。ちなみに、現在に伝わる浄土宗（全国に約八千寺、門徒衆は約六四五万人）は鎮西派の流れをくむ。西山派の名称は、支祖（西山）が京の山城国、西山の地に住んでいたことから名付けられた。

―若いとき、苦悩の日々を送る―

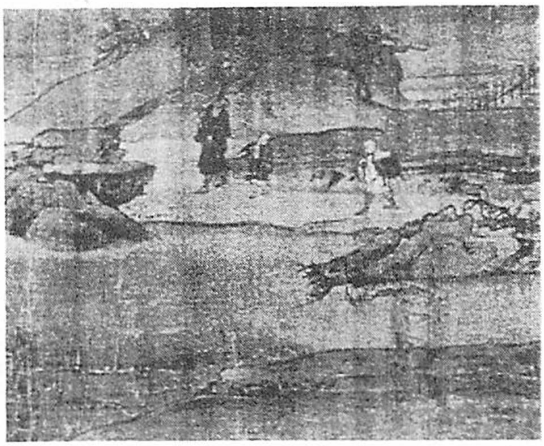
こうして智真（一遍）は十三歳から二五歳までの十三年間、太宰府のもとで修行を積む。転機がおとずれるのは、弘長三（一二六三）年五月二四日、父の死で郷里伊予にもどる。還俗して在家の生活を始める。しかし、半僧半俗の生活で武家の相続や妻帯の女性問題など、一族の葛藤ゆえに苦悩の日々を送る。

俗界の利害のもつれに嫌気がさした智真は、そのころ師の聖達のもとに聖戒を連れて相談に行っている。

再出家を決意した智真にとって最も重要なことは、おのれ自信の「悟り」であった。浄土教の教義はおよそ判っていたが、それだけでは満足できなかったのであろう。その機会を得るために霊所を巡拝した。

文永八（一二七一）年春、信州長野の善光寺に詣でる。この古刹は、すでに六八一年に造営され、天台宗と浄土宗両派の流れをくむ独自の宗派であった。

ここで参籠をし、感得したのが寺に伝わる二河白道図（次頁写真）に描かれた苦悩する人の姿であった。この古絵に自分自身の姿を重ね合わせた智真は、これを持ち帰って同年秋から翌々年までの二年間、伊予の窪寺に結



（上）一遍13歳で太宰府の聖達の禅室に向かう
（「聖絵」第１巻第一段）

（左）一遍の生まれた寺とされる宝厳寺
（伊予国道後）

んだ庵寺の本尊とし、称名念仏に明け暮れた。

当時、世の中は騒然としていた。蒙古襲来（元寇）の直前であり文永の役（一二七一年）と再度の弘安の役（一二八一年）には、河野一族からは河野道有ら、また豊後では後に触れる大友入道頼泰ら西国の将兵が奮戦したのであった。

こうして「悟り」の境地に達した智真一遍は、出家の本義である「捨家棄欲」に徹することで、衆生に利益を与えることが出来ると確信した。冒頭（第一章）で述べたように「捨てる心まで捨てよ」と「捨て聖」になりき

―二河白道図―

この絵は損傷が甚だしく、時代も鎌倉時代をさかのぼらないが、それでも一遍聖人の修行をしのぶ一つの手がかりになるという。（54頁に解説）
神奈川県藤沢市の清浄光寺所蔵
（『日本文化史大系６』）より。

り家屋敷を捨て所領を捨て、さらには一所不住から郷土をも捨てて、遊行の旅に出ることを決心した。ときに文永一一（一二七四）年二月八日、智真三六歳であった（時宗宗学林学頭・長島尚道監修『一遍聖人』添付資料㈢「聖人略年表」による）。

三　時宗の特徴――①　賦算念仏

浄土宗に属する時宗の特徴としては、何より「賦算念仏」と「踊り念仏」を挙げねばなるまい。

ところで、仏教語とされる「賦算」には、どのような意味が含まれているのであろうか。その解字は、むずかしい。

漢和辞典に

よると―「賦」とは元来、朝廷に献上する財物、人民に割り当てられるもの、すなわち租税。また、その人民・兵士をも意味し、のちに配ることに転じたと誌す。

一方、「算」は、数をかぞえること。漢字の「算」は、中国の昔の計算器「算盤」から出たようだ。遣唐使が昔（七―九世紀）、中国から持ち帰ったのかと思っていたが、そうではなく、室町末期に伝来したとある（広辞苑）。現在、そろばんは家々から姿を消し、卓上電子計算機に取って替わられた。

要するに「賦算」とは―後に述べるように、聖人が遊行で熊野権現から授かったとする神勅に基づき、極楽往生が可能であることを証するお礼、すなわち「算」を広く衆生に配ること、である。一遍は、これにより衆生と仏陀を取り結ぶ結縁として、信者になることを勧めようとしたのである。

(1)神託念仏―「算」を配る

智真（一遍）は文永一一（一二七四）年二月、同行三人、それは尼僧の妻・超一とその娘・超二、それに念仏房（世話役）を連れて伊予を出、諸国遍歴の「遊行」に旅立つ。

桜井の泊（今治市）で見送りの聖戒と別れ、摂津（大阪）に向かう。四天王寺で、十重禁戒の教えを修する。

この教えは、大乗仏教の戒律で、不殺戒（人を殺してはならない）、不盗戒（人の物を盗んではならない）不淫戒（不倫をしてはならない）など、十種にのぼる。日常の世人の、いわば行為規範であった。

また、この寺には、聖徳太子のご親筆という「御手印縁起書」が伝えられていた。この教典を読んで智真は、念仏札を配ることを感得した、という。その札には、南無阿弥陀仏・決定往生・六十万人と刻されていた（写真参照）。一説では、熊野神から授かったという（この方が通説）が、その真相は定かでない。

智真は、大阪の地ではじめて賦算を実践しながら、高野山へと向かう。高野山は、いわば学僧、「学侶」の山ですでに八一六年、僧空海が金剛峰寺を造営し、真言宗の聖地とされていた。これより山また山、谿また谿の難路に苦労しながら、諸国の人々に信仰の篤い「熊野詣で」をしようとした。

この熊野は、古代信仰で伊勢神宮（祭神は天照大神）

を「表」とすれば、その「裏」に当たる死者の国とされ、苦業することで死者の罪悪を祓うことができると考えられていた（伊勢・熊野一体説）。

当初、巡礼者は、伊勢路から熊野に向かうのが慣例とされていた。平安中期、院政時代になると、熊野三山の社の管理者は急速に仏教に傾斜し、修験者が密教にならい支配するようになっていた。自来、公式の熊野参詣は、紀伊路によるようになったといわれる。

―賦算念仏、その真価が問われる―

熊野へ向かう途中、思いがけないハプニングが起きる。旅僧の一行に会う。それは威儀の整った僧、二人の冠りものをした上臈（貴婦人）、それに三人の従者たちであった。智真は早速、念仏札を渡そうとした。旅僧は受け取らず、にらみすえて言った。「いま一念の信心、起り侍らず。受けば妄語なるべし（うそ事を信じることになる）」、と（この光景は、後に触れる「聖絵」に描かれている）。

思い悩んだ智真は、意を決して、熊野大神の神意を伺おうと参籠（二十一日間）したのである。

満願の早朝、夢中に現れた白髪の翁（神の化身）の託宣は―「御房（注、智真のこと）のすすめによりて往生するには非ず。阿弥陀仏の十却正覚（真理を体得した永遠の悟り）により衆生は必定する（必ず往生できる）ところなり。信不信をえらばず、浄不浄を問わず、その札を配るべし」、と。

このような託宣を神から授かった智真は、欣喜雀躍したことであろう。のちに、一遍は「我が法門は熊野権現夢想の口伝なり」と述べている（「一遍語録」）。

もっとも、この点については異説もある。それは時宗関係者が後世になって「作意」し、「熊野神と結びつけることで布教上の正統性を得ようとしたのであろう」、と。当然、そのようなうがった見解もあろう。しかし、ここでは仏書の記述を信じたい。

遊行の時に配られた
―「念仏札」―

なお、この旅僧について。筆者は当初、この僧は禅宗系の修行僧と思っていた。しかし、その後に、道元（一

二〇〇―五三）の開く禅宗の興隆期は少々後であること、この当時の巡礼者たちに修験僧と律僧が多いことを知った。別書（『日本文化史大系』第六巻）にも「律僧」となっているから、この方が正しいのであろう。

律宗は南都（奈良）六宗の一つで、現存しているのは本山が東大寺（大仏殿完成七五一年）の華厳宗、薬師寺の法相宗、それに唐招提寺（唐の鑑真が来日して造営）の律宗、この三宗のみである。

律宗の教義は戒律が厳しく、実践を重んじる宗派であった。なればこそ、この旅僧のような毅然たる態度がとれたのであるまいか。

(2)六十万人頌の謂われ―

聖戒は一遍聖人の入滅後、この熊野での宗教体験を、聖人が熊野神から授かった「聖頌」（「頌」＝偈頌、ともに仏陀のほめ言葉、讃辞）として書き遺している。この「頌」は、後世にまで時宗の根本命題とされ、また秘伝とされた。聖人はこの神託以後、みずからを〈一遍智真〉と呼ぶようになった。

六字名号一遍法　十界依正一遍躰
万行離念一遍証　人中上々妙好華

一遍への、この讃辞は、四行の頭文字が「六十万人」となることから、「六十万人の頌」とも呼ばれる。また、その思想は禅宗的発想（哲学上の弁証法）と考えられ、禅宗の教義とともに、われわれ凡人には容易に理解しがたい。

学識者の助言により、およそ次のように解説できると思う（その道の方のご教示を願いたい）。

文中に見える「一」と「十」、それに「一遍」の解字には「一」と「遍」に分け、それらは矛盾する対立概念として把握する。すなわち、「一」は理性・ロゴスを意味し、「遍」は普遍の遍で、世のあらゆる事象・現象と解する。

最初の句言（一行目）―ナムアミダ仏（南無阿弥陀仏）の六字を口誦することの裡に本質と現象とが止揚される（それこそ一遍聖人の説く法である）。

さらにこれを超越したものとして二行目の、もろもろ（諸々）の正報の現象も一遍の「躰」（身体）に現れる。「正報」とは、過去の行為の結果、報いとして受ける心

身のことである。また諸々の行為も俗念を離れて（一遍の）「証」に現れる。四行目ー数多くの苦悩を修業する者こそ泥の池の中に咲くきれいな蓮のような存在なのである。数多い人々の中で最高の徳を備えた仏僧、それこそ一遍聖人その人なのである。

ちなみに、哲学の領域で説く「弁証法」とはー有限（無限に対する）なものは自己自身のなかで必ず自己と矛盾し、それによって自己を止揚し、反対者へと移ってゆく。たとえば人間の生は有限ではない。やがて死を迎える（必然）。そのためには「人生をどう生きるか」であり、よりよく生きることで「死」に昇華する、と。

全世界もまた、不断の運動・変化・発展のうちにある（どんな強大国家も永遠に栄えることはない。「おごる平氏は久しからず」）。弁証法は、イデー（観念）の自己発展という観念論的な形で発展した、と説く。これに対してマルクス（一八一八ー一八八三）は、唯物論の立場から、空想的でなく科学的なもの（唯物弁証法）へと発展させたのであった（『哲学辞典』）。

さて、一遍は、先の神託によって、浄土教の長い間の論争であった浄穢（浄僧と穢僧）の教義上の対立から超越することができた。

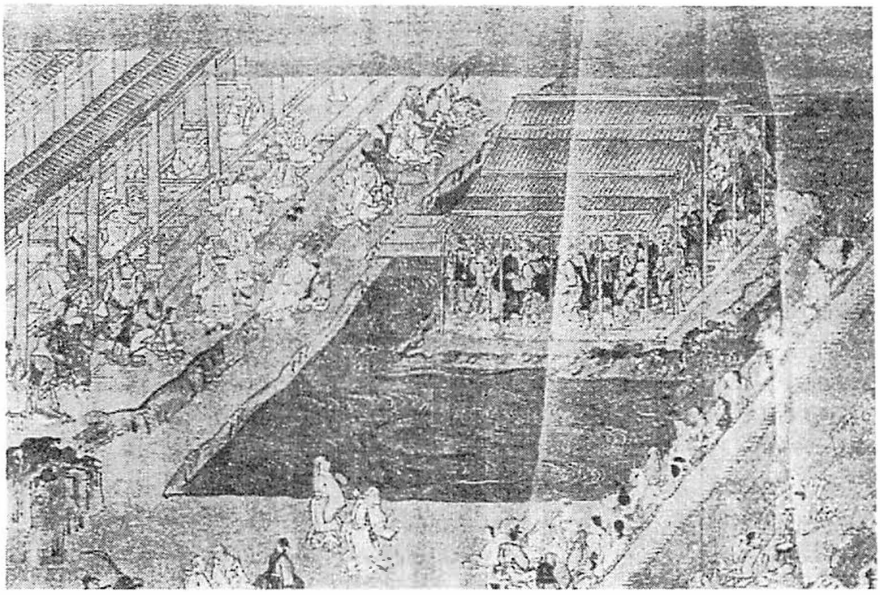
また、「捨て聖」と尊称されるようにあらゆる欲望を「捨ててこそ」の信念に徹し、北は奥州から西は九州へと諸国を遍歴し、賦算念仏を勧めた。名帳（名簿）に登録した人数は、実に十六年間で二十五万一七二四人の多きに達したと記録されている。

信者には幕府御家人の武士が多かったことも注目されるが、それ以上に一般大衆が結縁しなければ、この数には達しえなかったことも銘記されるべきであろう。

四　時宗の特徴ー②　踊り念仏

聖人の遊行で、賦算と並んで衆目を集めたのが「踊り念仏」である。

これは念仏を口誦しながら集団で踊るもので、今日、夏の主要な盆行事「供養踊り」の源流とされている。神仏の前では威儀をただし、敬虔な祈りの中でお祓いなり読経をするのが通例で、この点、今も昔も変らない。往時の神仏信仰からすれば、このような所作の踊りは決して許されるものではなかった。



近江・関寺（遊行コース⑰）での「踊り念仏」の光景
（「聖絵」第７巻第２段）

(1)　供養踊りに活躍した尼僧たち

京都歓喜光寺所蔵の国宝に指定された聖絵（絵伝）の中に、この念仏踊りの光景が如実に描き出されている。その巻絵の光景は、次のとおり。

－高床の屋根付きの舞台が組まれ、その上で尼僧たちが時計回りに踊っており、その中に聖人らしい人物も描かれている。見物に集まった人たちは、周囲から舞台を見上げている。見物人のための桟敷もつくられ、飲食しながら見ている人もいる。

恐らく、この尼僧たちは、脚を跳ねあげ袖をまくり、床を踏み鳴らして激しく踊ったものと思われる。この踊りの輪に重要な役割を果たしたのが、聖人に同行した尼僧たちであった。女性が輪に加わることで艶めかしく、声も響きとおり、恍惚の法悦に酔いしれた。人々は「算」をもらい、踊り狂うことで「極楽浄土」へのキップを手に入れたような気になったのかもしれない。現代社会とちがい、当時は極楽の少ない時代であった。

踊り念仏が始まったのは、遊行が行われてから五年目、とされる。

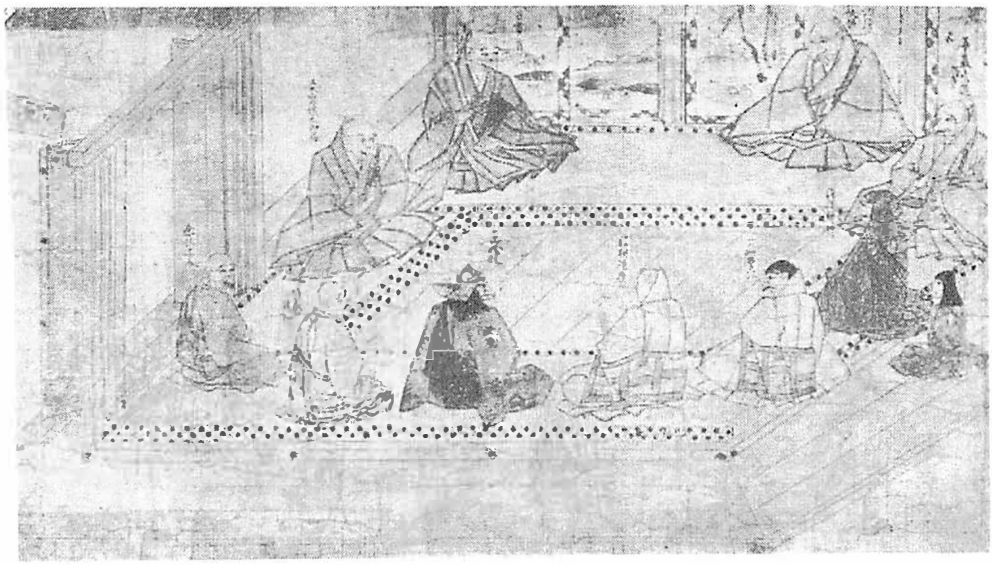
先掲「聖絵」の他にも、信州の武家屋敷の庭先で尼僧

や武士たちが楽しげに踊っている（後述、遊行コース⑤）絵巻も見られる。その添書に「数百人踊り…」とあることから、種々の人たちが加わり、かなり大規模のものであったらしい。

このような聖人らの「踊り念仏」集団に対して、心よく思わぬ批判勢力が現れても不思議ではない。現存する「天狗草紙」（永仁年間、作者不詳。東京国立博物館他所蔵）には、一遍智真を「天狗長老一遍房の仕業」として愚弄し、こう記述している。

「念仏するときは頭を振り、肩を振りて踊るさま、野馬のごとし。おぞましき事、山猿と異ならず。男女の根（注、局所）をかくすことなく、食物をつかみ喰い、畜生道の業因とみるべし」

また、一遍批判派の残した「絵詞」にも、下半身が露出した踊り念仏や、一遍の尿を授かる女性の姿まで描き出している（「魔仏一如絵詞」日本大学総合学術センター所蔵）。これらにより、他宗派から嘲笑や揶揄がいかにひどかったかが判るであろう。



「天狗草紙（てんぐぞうし）」（部分）
（『日本文化史大系６』より転写）

―鎌倉の権力と時衆たたこう―

信州小田切の寂しい里（コース⑤）で始めたと伝える、この踊り念仏が一時期、下火になったことがある。

ときは、まさに蒙古襲来（文永と弘安の二つの役）の直前。鎌倉の政治権力によって、このような宗教集団による活動は、決して望ましいものではなかったろう。先の第二次大戦下の社会状況を考えれば、容易に納得できることである。

弾圧の契機は―全国遊行で東北の旅を終えた聖人一行は鎌倉に入ろうとする。執権・北条時宗（一二五一―八四）の行列が鎌倉を出ようとする当日を選び、回り道までして正面衝突したのである。世人の関心を集めるには、あえて日蓮聖人のように、権力と戦う姿勢を大衆に見せつける必要があったのかもしれない。

叙上のように、一遍聖人は「踊り念仏」を通して尼僧に社会活動の場を与え、世間の関心を呼ぼうとした。現代社会は周知のように、男女の社会共生、機会均等、同権の原則から、女性にも広く職場が与えられ、世界の第一線で堂々と活動している人も多い。そのような先駆けとも言えなくもないだろう。

(2) 豊前の「バンバ（傘鉾）踊り」

安心院（あじむ）盆地の周辺地域に、古くから伝承しているものに「盆の庭入り」行事がある。その中で注目されるのが、念仏踊りの原型ではないかとされる「バンバ（傘鉾（かさぼこ））踊

鎌倉入りを阻止された一遍たち（右―幕府側）
（「聖絵」第５巻 第５段）

り」である。

別府市天間地区の盆（八月十三―十四日）行事については、すでに昭和五九年（故人）松岡実氏（本会元副会長、元市文化財調査員）が市教委刊の広報雑「べっぷの文化財」（第一五号）に詳しく紹介している。

これ以前にも氏は同四七年、中央の歴史学会誌（大正大学「宗教と民族」）に貴重な調査報告書を寄稿しておられる。

その中で、次のような所見が注目される。「頭に冠りもの、扇子をもち、熱狂的な乱舞と静寂な舞との公錯など、このバンバ踊りは念仏踊りのすべてを含んでいるように見える」、「その踊り様は、非常にテンポが早く、南方やアフリカ原住民の踊り方に似て乱調子で、脚を強く前に蹴り出し……踊る青年も、見物の女性もしだいに興奮ぎみになり、まるで踊り狂っているようである」、など。

市の天間地区では、例年盆の夜、地区民が正圓寺に集まり、男性が和讃という歌をまず唄う。

その後、竹ひごや色とりどりの布、提灯で飾った大きな傘鉾を中心に、太鼓や鉦を鳴らしながら男女が踊る。

この「和讃」とは、和語で仏の業績を讃える歌のこと。平安時代から江戸時代にかけて盛んに歌われ、七五調風に句を重ね、親鸞が四句一節にしたと伝えられる。

当地での具体的な和讃調のくどき文句は、先の松岡氏の本誌「別府史談」第一〇号に寄稿の「盆の庭入り行事とバンバ踊り」を参照して頂きたい（本号追悼論稿）。

この豊前地区で、何故に念仏踊りの原型とされるものが残っているかも、興味をそそられる点である。江戸期、豊前四日市（宇佐市）所在の豊前善光寺（初めは天台宗、のち時宗、徳川期よりは浄土宗）の布教活動に関係があったのではないか、と言われている。

(3) 全国遊行のコース（径路）

一遍聖人は「捨て聖」になりきり、諸国を遍歴したのは文永一〇（一二七三）年から死去の年、正応元（一二八九）年までの十六年間である。このうち、賦算と踊り念仏を始めた時からの遊行のコースを資料に基づき掲出してみよう（前掲『一遍聖人』資料㈡―」―聖人遊行回国図、朝日新聞日曜版「名画日本史―一遍聖絵」二〇〇〇年一一月一九日号）。

（弘安元年）①伊予道後（愛媛県）→②厳島神社（広島県宮島町）→③備前福岡の市（岡山県）→④京都因幡堂（京都市五条）→⑤信州（佐久、小田切の里、半野など）→⑥善光寺（以上長野県）→⑦下野国（栃木県）→⑧白河の関（福島県白河町）→⑨奥州江刺（岩手県、祖父通信の墳墓）→⑩平泉中尊寺（岩手県）→⑪松島明神（宮城県松島）→⑫常陸国（茨城県）→⑬武蔵国（東京都台東区）→⑭鎌倉（神奈川県）

⑮伊豆国三島大社（静岡県三島町）→⑯尾張国（愛知県）→⑰近江国（滋賀県）→⑱京都（釈迦堂・因幡堂悲田院・蓮光寺など）→⑲丹波国（京都府）→⑳丹後国（京都北部）→㉑美作国一の宮（岡山県北部）→㉒大阪四天王寺、住吉（大阪市内）→㉓大和国当麻（奈良県）→㉔石清水八幡宮（京都府八幡市）→㉕播磨国書写山（姫路市）→㉖備中国（岡山県）→㉗備後国一の宮（広島県）→㉘安芸国宮島（広島県）→㉙伊予国石屋寺（愛媛県）→㉚大三島神社（愛媛県）→㉛讃岐国善通寺（香川県）→㉜曼陀羅寺（同上）→㉝淡路島福良泊（兵庫県）→㉞淡路国一の宮（兵庫県）→㉟兵庫観音堂（神戸市兵庫区真光寺）⇓死去（正応二年）

このように一遍聖人は、一つの寺に永住することなく（一所不住）、少数の弟子を連れて「算」を配り、踊り念仏をしながら各地を巡った。奥州の地では、祖父、河野通信の墓詣りもしている（⑨）。①以前のコースについては、紙幅の都合で省略した。その後のコースについては径路を主にし、詳細な遊行地は避けることにした。

五　一遍聖人と鉄輪温泉

一遍聖人は諸国遊行の旅で、主に二度ほど九州を訪ねている。

第一回は一〇歳で出家し、十三歳で筑前太宰府の学僧聖達の門に入った時（建長三年）、である。第二回は、熊野権現で神勅を授かってから伊予へ帰り、二年後に九州の遊行を思い立った時（建治二年）、である。

(1)　九州遊行と上陸地

『豊後風土記』と『伊予風土記』（但し、逸文）の中には、すでに伊予と豊国との間に交流があったと思われる内容が記述されている。

その事から上陸地点は、思うに別府湾沿いの「速見の湯」（別府温泉）、たとえば地名にまで残っている亀川温泉寄りの「聖人カ浜」か浜脇、あるいは六郷満山で早くから開けていた国崎（東）のどこかの浦、ではなかったろうか。また、太宰府に行くからには、豊前中津の浦から修験僧の開いた道場、英彦山を通る日田―太宰府のコースも考えられよう。

いずれにしろ、これを証する確かな文献は見られないというのが通説である（県立図書館・同公文書館談）。上陸地点については、仏教関係書でも直接触れてはいないようだ。

―太宰府に住む旧師、聖達聖人の禅室を再び訪ねた一遍智真は、さらに筑前から海路で河野水軍と交流があったとする松浦黨の手を借り、肥後の球磨川河口に上陸。南下しながら肥後を遊行し、薩摩に入る。ここでは、まず松峰山浄光明寺（鹿児島市）を訪ねている。この寺は現在、南州神社境内の一隅に、わずかに庫裡を残しているに過ぎない。

さらに、大隅国の正八幡宮へ。これは古い神社で、かっては官幣大社（大隅一の宮）、祭神はアマツヒコホホデミノ（天津彦穂々出見）尊、現在の鹿児島神宮（同県国分市隼人町鎮座）である（日本史小百科『神社』）。

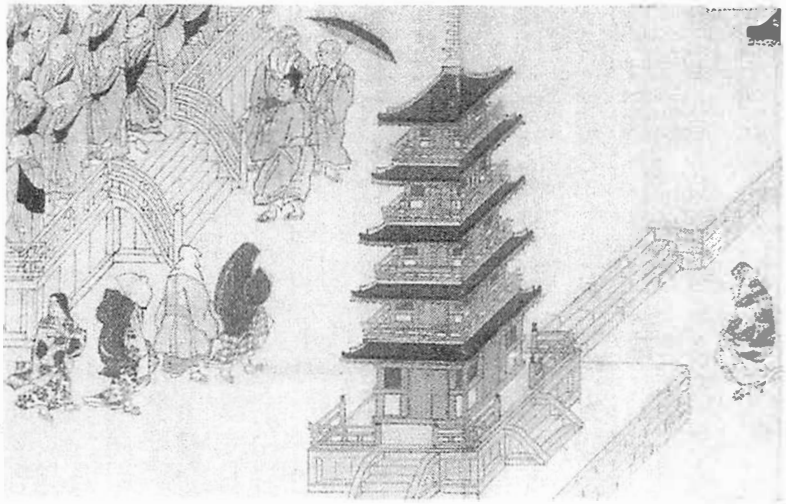
つづいて伊予へ帰る途中、一遍は豊後国に立ち寄っている。

確かな資料によると―ときは「建長三年秋ノ頃、九州豊後国府ニ修ス」「大友入道頼泰帰依シタマヒテ衣ナド奉リケリ」「コノ時、二祖他阿弥入信ス」などと記載されている（「聖絵」詞書ほか）。

ここにいう他阿弥「真教」（一二三七―一三一九）は、府内（大分市）の瑞光寺に住んでいた。生年は嘉禎三年、だが家系や出身地は不明、という。出家ののち、浄土宗西山派祖、弁長の弟子になった。何故に府内に来住したかも不詳。二つ年下の一遍の弟子になった真教は、遊行する一遍に終生したがい、弟子たち（時衆）の中心的存在となって聖人の最後を看取っている。

九州遊行は、「略年表」によれば、その期間は一年ほど。よって豊後国滞留は、およそ半年ぐらいと思われる。「一遍聖絵」の詞書にも、鉄輪や松寿寺のことは全く触れられていない。

しかし、この期間に鉄輪を訪ねたことは、ほぼ間違い



この当時の鉄輪温泉「松寿庵寺」

永福寺所蔵の「松寿庵境内絵図」（複写）では、境内に隣接した両側に鳥居と石灯籠（１対）とを前にした石祠が建てられている。
これが熊野権現社であった、という。

「二河白道図」の解説（本稿四三頁）

中国浄土教の開祖で、法然が師と仰いだ善導大師が「観経疎散善義」にひいている譬（たと）え話である。

西に向って千里の道を歩いてきた旅人の行く手の右に火災の河、左手に波浪さかまく水が立ちはだかる。うしろを見れば、掴みかからんばかりの群賊悪獣たち。火と水の中間に、狭く白い道が向う岸まで通じている。旅人は思わず立ちすくむ。

その時、どこからともなく「真っすぐに進め」という声が聞こえた。旅人はその声に励まされて、ようやく向う岸にたどり着いた、という。西岸とは、即ち理想の西方浄土であり、この話は、誘惑や恐怖に負けず、一心に念仏すれば誰でも極楽浄土に生まれることが出来ることを示している。

ないのではあるまいか。それが湯治のためか、鉄輪を湯治場として整備するためかも、真相は判らない。鎌倉時代末期には、すでに鉄輪が湯治場として広く知られていた（「大友家文書」、「吾妻鏡」）というから、聖人が蒸風呂など整備に尽力されたことは、ほぼ正鵠を得た見解とみてよいであろう。

もともと仏教では、風呂は一つには身を清め、一つには薬湯として病者に対する施餓鬼（飢餓に苦しんで災いをなす鬼や無縁亡者の霊に飲食を施す法会）として供養する習慣があり、有名なのは光明皇后の説話などにも書かれている。

(2) 鉄輪温泉と松寿庵寺（僧房）

一遍聖人が鉄輪温泉を開いたとして、この時、当地に残したのが松寿庵寺（僧房）である。

時代は、とかく史料の乏しい中世から、比較的に多い近世を経て、明治に入る。

徳川期は宝暦年間（一七五一－六四年、九代将軍家重のころ）、藤沢（神奈川県藤沢市西宮）の総本山・清浄光寺（第四代遊行聖人の呑海、自分の出身地に建立）に鉄輪村住民から提出された「末寺願」（筆写）が現在、県公文書館に遺されている。

それによると、延享五（一七四八）年二月九日付け、百姓代・助左衛門の名義で次のような願い書が提出されている。その要旨を次に掲げる－

一　聖人の開いた当庵寺は歴史も古く、村中の尊崇を集めてきた。また、聖人の忌日、八月二十三日には毎年、「聖人講」もしくは「開山忌講」と称して法要を絶やしたことはないこと。

一　室町から徳川時代に入っても、その時どきの遊行聖人（注、豊後国を遊行したのは第三九～五七代聖人のうち九人ほど）がこの地に立ち寄って下さり、その都度、何がしかの寄進を頂いたこと。

一　最近（宝暦年間）では、当庵も檀家がいない無檀寺となり、定住の僧がいないため、住みついた僧の宗派になってしまったこと。

一　村では、湯治客から入浴の度に二四文（注、戦前の金額で二銭四厘、明治初期一文銭一〇枚を一銭とした）を徴収し、石風呂（蒸湯）の湯屋や庵寺営繕費に当ててきたこと

一　ところが最近、この石風呂を個人で買い取ろうという者まで現れて、村では困惑していること。

これらの内容は、当時の社会的背景をうかがわせて興味を呼ぶ。

とりわけ、重要なのは第三項と最後の項目であろう。当庵寺を時宗の正式な末寺として認め、定住の僧を派遣して欲しいこと。また石風呂の権利も、従前どおり村の共有財産として確固なものにしたい、と考えたのであろう。

この願い書に対して、総本山・清浄光寺の役員僧（宗門代表者）・領軒から鉄輪村代表の新兵衛、善右衛門ほか、総百姓当てに「聞済」（承知、許可）の返事が届いて一件落着をみている。

こうして松寿庵は、正式に時宗系の末寺とすることが認められ、宝暦六（一七五六）年、本寺から諄盈和尚が住持職として派遣された。

ところが、その後、村人たちは新兵衛ら三人が勝手に願い出たことと反発し、日田代官所に訴え出た。代官所側は、明和五年二月九日付けで、一度決まったことを今さら苦情を申し立てるのは不届仕極、と重立ち衆三人を入牢処分にした（この時、紛争になっていた寺領と住民の私有地との境界が確定した）。詳細は、本誌『別府史談』第一一号（一九九七年）掲載の小泊立矢氏の貴重な論稿を参照されたい。

(3)　明治期、松寿庵から現永福寺へ

時宗末寺となった松寿庵寺で、その第一二代を継ぐ住職の専秀和尚が維新後の明治四年十一月二十三日に亡くなった。

この時、維新政府（県）に死亡届が出されなかった。これまで松寿庵では、住職が病死した場合、慣例で時宗の中本山、京都七条の道場（市中山金光寺）に届け出て、後任住職を派遣してもらっていた。

届出をしなかった結果、当庵は無住ということで、政府は、時の政策（神仏判然令）にしたがい「廃寺」扱いとした。困惑した信徒らは、同十八年一月二十九日付けで、県に対して「廃庵再興願」を提出した。

その時の添付資料「温泉山松寿寺由緒書」にも―

鉄輪温泉「永福寺」（左柱に一遍聖人道場の字が見える）

別府市営 むし湯

鎌倉時代（建治三年）時宗開祖一遍上人九州行脚の折鉄輪に八丁四面の大地獄であったので大蔵経の一字一石をもつてこれを埋め当時瀬戸内で盛んに行なわれていた石風呂の手法をとり入れこの蒸し湯を設けたという。

数きつめられた石菖の薬効と蒸気が溶けあつて神経痛リューマチ関節炎などに特効がある。一昔前までは沢山の松葉杖が奉納されていた。

蒸し湯は別府を代表する名湯であると共に古代から中世にかけての日本の一般的入浴法であつた。

石風呂の風習を残す文化遺産です。

別府市
鉄輪愛酎会

鉄輪温泉「湯あみ祭」（秋彼岸の日）（人物は住転・河野憲勝氏）

コノ時、兵庫頭大友入道頼泰、聖人（ニ）帰依シ、一宇ヲ建立シ奉リ、聖人（ハ）、温泉と幼名松寿丸ヲ象リテ温泉山松寿寺ト称シ玉ヘリ。期ニ於イテ温泉守護（シ）末代（マデ）衆生（ト）結縁ノ為メ、手ッ柄自像ヲ彫シテ玉ヘリ。

この文章から、温泉山松寿寺（注、それ以前の寺名は「湯滝山豊鶴院松寿寺」）は一遍聖人自らが名付けたこと、また自らが彫刻したとする「木造仏」も現在に遺されている。秋の彼岸の日には、聖人の遺徳を偲んで「湯浴み祭」が盛大に行われている（写真参照）。

さて、話は前にもどる。

―「廃庵再興願」を県へ提出した前年の明治十七年、同庵再興をめぐり総本山（遊行寺）では、西国地方の末寺を統轄する長州赤間関所在、長楽山専念寺（現下関市南部町）の派出役僧・河野智元師に鉄輪現地の調査を命じ、村方と交渉させている。

その結果、同年十二月二十八日付きで、村方衆（代表者安波利一、加藤新市ほか十五名連署）と結んだ「転宗改寺志願証」が当該永福寺に現存する。こうして、県より「永福寺寺号移転許可」が出たのは、七年後の明治二四年九月二十四日のことであった。

この時以来、温泉山松寿寺は「温泉山永福寺」と寺名を改称して、今日に及んでいる。河野智元の弟子、智円が後を継ぎ、つづいて智善、その子・憲勝氏が現在の住職を勤めておられる。

(4) 永福寺所蔵の「遊行聖人絵伝」

鉄輪温泉永福寺所蔵の「遊行聖人絵伝」が今から四年前の平成九年六月三十日の日付けで、国の重要文化財に指定された。

この絵伝については、別府市教委の広報冊子「べっぷの文化財」第二一号（平成元年）に紹介されており、昭和四十二年すでに別府市の文化財に指定されていた。

この指定物制作の年代については、「室町時代から江戸前期にかけて」と推定されていた。

ところが、この方面の研究学者（宮次男氏）の詳細な調査により、その年代は「一四世紀後半を降らない頃の制定」と鑑定された。その結果、冒頭のように国の重要

文化財に指定されたのであった。

この指定絵巻物の正式の名称は「紙本著色遊行聖人絵伝（巻七ー一巻）」。形状は縦三一・五センチ、長さ一四九六・二センチで南北朝時代の制作、とされている。

この「聖人絵伝」は全一〇巻であり、前半四巻は一遍の伝記、後半六巻は二祖・他阿弥真教の伝記からなる。このうち、鉄輪永福寺所蔵のものは全一〇巻中、巻七の中の一巻のみで、その内容は六段（詳細は省略）から構成されている。

ー薩摩の時宗系寺のものかー

どうして、鉄輪の永福寺所蔵になったのか。

恐らく出所は、薩摩国の前述松峰山・浄明寺の什器ではなかったか、という。

この浄光明寺も、ご多分に漏れず、薩摩藩の徹底的な廃仏毀釈で明治二年、維新政府により「廃寺」とされた。当時、薩摩藩でも、官憲の立会いで仏像・経典・仏具の類はすべて焼却され、ひそかに土中に埋葬したものだけが難を免れたと伝えられる。当該指定物件も、その一つではなかったかと推測されている。

仮に同寺院所蔵であったとすれば、巻七のみが藩外に持ち出され、いつの日か、由緒ある鉄輪の現永福寺に寄贈されたのであろうとする。ちなみに時宗の末寺は、鹿児島県も当大分県も、ともに両寺だけであった（宮崎県は二寺）。

そうしたことから、九州地方の時宗系の寺合計十三寺では相互に交流し、情報交換していたのかもしれない。

詳細については、先掲の労作「小泊論稿」を参照して頂きたい。

六　時宗教団の成立と盛衰

一遍聖人は、入滅に臨んで「我が化導は一代限りぞ」と言い遺した。事実、存命中は一寺の建立も無く、立教開宗の意図もなかった。

聖人の没後、あとを慕って自殺者が何人も出た。その中で、愛弟子たちは、どうなっていっただろうか。

弟の聖戒は伊予へもどり、のちに山城国（京都府）へ移り、京都六条に一寺、柴台山歓喜光寺（京都府山科区）を建立した。のちの十二派の一つで、六条派の起こりで

ある。

一方、聖人の後継をめぐり、肉親の聖戒とは仲が悪かったという他人の最初の弟子、他阿弥真教（一二三七－一三一九）は、聖人入滅後山に入って自殺を決意する。だが信徒たちの懇願で思いとどまり、聖人の意志を継いで二祖（第二代遊行上人）となったことは、既述したとおりである。

彼もまた全国を十六年間にわたり遊行する。おもに北陸・関東・甲信越をまわり、道場や寺を増やして時衆を積極的に定住・布教させ、教団の基盤を固めた。その数は百にも及んだ、という。嘉元二年、隠居してからも教団の発展に協力し、鎌倉武士や京都の貴族とも親交があった。また、分派（当麻派）を開いたが元応三年三月二十七日、相模当麻（神奈川県相模原市）の当麻山無量光寺で入滅、ときに八三歳であった。

「真教」（第２代遊行上人）

二祖・真教のあと、三祖は智得（一二六〇－一三二〇）。四祖の呑海（一二六五－一三二七）は、自身の郷里の藤沢（神奈川県藤沢市）の地に清浄光寺、通称「遊行寺」を創設（遊行派の分祖となる）。五祖・安国のとき、時宗の本山となる。かくして時衆（宗）教団は南北朝から室町時代にかけて、隆盛をみたのであった。

(1)　時宗より日本の芸能が育つ

室町の初期には、時宗は「禅」にも接近し、領主・武士層に受け容れられるようになった。時宗の僧侶は各地方で連歌・茶の湯・生花など芸能・文芸などにも進出し、時宗阿弥文化が開花する。

現在にまで伝わる世阿弥（一三六三－一四四三）の「能」は足利義満の庇護を受け、能楽を優雅なものに育てあげた。のち、相阿弥（室町後期－画家）とつづき、阿弥仏陀の名をもつ芸能者を多数輩出したのであった。

その後の日本独自の芸能・演芸の発展に目を向けると

き、筆者は、その原点に一遍の「踊り念仏」があるように思えてならない。仏教を一挙に大衆のレベルにまで引き下ろす、そのために「舞台」を使用した（舞台の発見）こと、また言葉ではなく、現代風にいえば「肉体的パフォーマンス（演技・動作）」の持つ必要性（マスメディアのもつ効率性）に気付いた点、一遍の慧眼といってもよいのではあるまいか。

だが教団では一時期、十二派（遊行派・一向派・四条派・当麻派など）まで生じて紛糾した。室町後期には戦乱（応仁の乱、一四六七－七七）がつづき、道場の焼失や遊行の困難から、しだいに衰微し、親鸞（一一七三－一二六二）の開いた浄土真宗が盛んになっていった。

(2) 時衆から時宗へ－宗名の確立

一遍の入滅後、門徒集団は、一日二十四時間を四時間ごとに六つ（六時）に仕切り、時刻と当番を決めて、ひたすら読経と念仏を誦しつづける。こうした一途な修行に明け暮らす僧尼たちを見て、世人は、これを「時衆」あるいは「六時衆」と呼んだのであった。

江戸時代に入り、時衆（宗）教団もまた、幕府のきびしい宗教統制をうける。すなわち、寺の開山や廃寺、本末寺関係、門徒人数などの報告書「末寺帳」の中で、初めて「時宗」の宗名が公然と使用されるに至った、と伝記は誌している。

現在では、各派系の本末関係も解消されて、先掲の藤沢市の通称「遊行寺」が総本山として、これを包括している。全国に所在する「時宗」の寺院総数は、開祖・一遍聖人の意志もあって他宗に比べて少ない。

九州地方では、遊行の機会も布教年数も短かったことから、特に少ない。福岡県での八寺につづき、宮崎県が二寺、熊本県・鹿児島県がそれぞれ一寺、大分県もまた鉄輪温泉の永福寺一寺だけである。全国の分布状況は、次の通りである（前掲書『一遍聖人』添付資料(iv)、平成十二年十月現在）。

- 北海道、東北地方　六二寺
- 関東、甲信越地方　一九五寺
- 北陸、東海地方　七〇寺
- 近畿地方　六四寺
- 中国、四国地方　二〇寺

・九州地方　一三寺
全国合計　四一四寺

(3) 参考－当時の仏教と宗派の概要

仏教は紀元前五世紀ごろ、インドのガンジス川中流地方に興った。仏陀シャカムニ（釈迦牟尼）の説法に基づき、人間の苦悩の解決の道を教えた。アショカ王の入信により、インド全土から国外へも広まり、一世紀ごろから東アジアの諸方にもおよんで現在に至っている。

インドで「大乗仏教」と「小乗仏教」とに分かれた。前者は紀元前後ごろ、インドに起った改革派で、従来のそれが出家者中心・自利中心であったのを批判し、それに対して自分たちは「菩薩」と呼んで在家者を重視し、利他中心の立場をとった。中国・日本・チベットなどの地方仏教は、いずれも大乗仏教の流れを受けている。

一方「小乗仏教」は、衆生済度を忘れて自己の解脱だけを考える立場である。仏教語（梵語）で、小乗とは「劣った乗物」の意味から、この文字を当てたといわれている。

－奈良時代から平安時代の仏教－

奈良時代に入ると、六つの宗派が中国から伝来した（南都六宗）。このうち、現在まで残っているのは薬師寺（と興福寺）を本山とする「法相宗」、東大寺の「華厳宗」、それに唐招提寺を本山とする「律宗」のみであることも既述したとおりである。

平安時代に入って、最澄（七六七－八二二）と空海（七七四－八三五）という傑出した仏教家があらわれ、前者は比叡山（延暦寺）に「天台宗」を、後者は高野山（金剛峰寺）に「真言宗」を開創し、これが日本人の僧侶による初めての開宗であった。この二宗は加持祈祷により貴族社会に浸透し、平安期の四百年間にわたって日本仏教の主流となった。

平安末期から鎌倉時代にかけて、幾多のすぐれた仏教家が出現し、次つぎに宗派を開創した。すなわち浄土信仰を説いた良忍（一〇七二－一一三二）の「融通念仏宗」、法然（一一三三－一二一二）の「浄土宗」、親鸞（一一七三－一二六二）の「浄土真宗」である。

これらにつづくのが一遍聖人の「時宗」であった。「禅宗」（のうち曹洞宗の開祖は道元一二〇〇－五三）と

日蓮（一二二二ー八三）の「法華宗」とは、この少し後である。室町時代に、新しく創始されたものは無い。江戸時代の初期、中国（明の時代）の禅僧、隠元（一五九二ー一六七三）が渡来し、京都（宇治市）に万福寺を創建して「黄檗宗」の開祖となっている。

現在のところ、日本では次の十三の宗派が存在し、宗教活動を展開している。

奈良時代・法相宗ー寺院数六〇		信徒数約六一万人	
・華厳寺	五八	〃	四万五千人
・律宗	一一五	〃	一三万五千人
平安時代・天台宗	約四二〇〇	〃	三一一万五千人
・真言宗	約一万二千	〃	一三八〇万人
鎌倉時代・融通念仏宗	三五七	〃	一三万人
・浄土宗	約八千	〃	六四五万人
・浄土真宗	約二万	〃	一三三五万人
・時宗	四一四	〃	二四万人
・臨済宗	約五八〇〇	〃	一九八万人
・曹洞宗	約一万五千	〃	六八八万人
・日蓮宗	約六八〇〇	〃	三四二〇万人
江戸時代・黄檗宗	四七〇	〃	三六万人

（以上『仏教辞典』、山野他共著『仏教宗派の常識』など）

参考文献

・栗田勇著『一遍聖人ー旅の思索者』（新潮社）
・浅山圓祥著『一遍と時衆』（一遍会発行）
・長島尚道監修『一遍聖人』（育英舎）
・栗田勇著『一遍聖人』（新潮文庫）
・図説『日本文化史大系6』（小学館）
・『国民百科事典（第一巻）』（平凡社）
・京大文学部国史研究室『日本史辞典』
・村上重良編『日本宗教事典』（講談社）
・宮家準著『日本の民族宗教』（講談社）
・湯浅泰雄著『日本人の宗教意識』（講談社）
・青木保他編『宗教と生活』（岩波書店）
・小口・堀監修『宗教学辞典』（東大出版会）
・小玉洋美著『大分県の民俗宗教』（修学社）
・渡辺照宏著『日本の仏教』（岩波新書）
・近代日本文化論『宗教と生活』（岩波書店）
・山野上純夫他共著『仏教宗派の常識』（朱鷺書房）
・『大分歴史事典』（大分放送）